

## (口絵解説)

## 花の病虫害 (10) ——キク——

## キクの生産状況

キクは切花、鉢物として生産され、栽培面積、出荷数量、生産額ともに我が国における花き生産のなかでは飛び抜けて多い。その理由は系統、品種が豊富なため、花形や草姿に変化が多く花色多彩で利用範囲が広範囲に及ぶうえ、日長処理と温度操作の如何で容易に周年開花できる点にある。

切花生産は全国各地に及び、近年の花の高級化と多様化傾向のなかで低迷要因が生じているものの、一方では水田農業確立対策や全国的な花き生産の増加の中において生産量は横這いから増加気味で、栽培面積は切花類合計の1/3に当たる5,500 ha程度となっている。主要な産地は、静岡県、愛知県、福岡県等で、品種は大中輪ギクが主体であるが、スプレーギクが伸びている。

スプレーギクは中輪の花色が鮮明な品種群でデコレーションフラワーとして人気を博している。基本的には我が国の在来種は、小ギクを除けば、花卉の裏面を鑑賞の対象としていたが、スプレーギクは花卉の表面を見るため、鮮明な色を味わうことができるという特徴がある。今後リフレックスタイプ等欧米の色彩豊かな大輪種の導入が期待される。

鉢もの、花壇用苗ものとしては、ポットマム、クッシュマム、スプレーギク等の品種が利用されるが、鉢もの、苗ものに占める割合は多くはない。

## キクの病虫害の発生状況

キクは切花においても、鉢花においても日本各地で広く栽培されていることにより、そこで発生する病虫害は非常に多い。また、産地では周年切れることなく栽培が続けられるため、病虫害の発生は恒常化している。

害虫関係では、吸汁害虫としてアブラムシ類、ハダニ類、アザミウマ類等の被害が大きいが、地域によってはメクラカメムシ類やキクグンバイも発生する。

アブラムシ類は早春～晩秋に連続的に発生する。切花産地ではワタアブラムシ（黄色又は黒緑色）が最も多く、薬剤抵抗性の出現で各地で問題となっている。家庭園芸ではキクヒメヒゲナガアブラムシ（赤褐色）やキクギケアブラムシ（淡緑色で角状管が長い）、スモモオマルアブラムシ（淡黄緑色、葉が萎縮する）の発生も多いが、これらのアブラムシ類は薬剤抵抗性の出現もなく、防除はたやすい。

ハダニ類は施設栽培で多発しやすいが、露地栽培でもしばしば多発する。吸汁を受けた葉はカスリ状に色が抜け、やがて葉全体が褐変枯死するため、葉も商品の一部

である切花では最も重視されている害虫である。一時病気が害虫かで騒がれていたキクモンサビダニもときどき発生し、全株に被害を生じることがあるが、親株の選択に注意すれば予防ができる。また、品種によっても被害の現れ方が異なる。

アザミウマ類では、5～6年前からミナミキイロアザミウマの被害が増加している。主として展開中の新葉に寄生するため、被害を受けた葉はケロイド症状を生じ、ときにはその部分が黄化するが、この被害症状の出方は品種によってかなり異なる。また、家庭園芸など小規模栽培ではケグロキイロアザミウマの発生も多いようである。虫が未展開の新葉の間に寄生し吸汁するため、被害を受けた新葉は淡褐色になり、かつ小さくなる。ヒラズハナアザミウマは主として花卉に寄生して吸汁するため、出荷した切花で花卉の一部が褐変し、花もちが悪くなる等の被害を生じる。

葉を食害して孔をあける害虫としては、ハスモンヨトウ、オオタバコガ、キクキンウワバなどがある。最も問題となるのはオオタバコガで、夏～秋に発生して葉や蕾を食い荒らす。薬剤に対する抵抗力が強いため、アブラムシ類を中心とした防除を行っているがこの虫のみが残り、気が付いたときには手遅れという現象がしばしばみられる。家庭園芸では、早春新芽が伸び始めた頃、ヨモギハムシの幼虫（長さ1センチ前後、褐色）が新芽に寄生し、新葉を丸坊主にして枯らすことがある。また、葉の裏面を浅く食害するヒメトガリノメイガ、キクツツミノガもときどき発生する。

葉の中に潜入する害虫としてナモグリバエが知られていたが、最近マメハモグリバエが急増しており、葉に白い食入痕を残すため、問題となっているが、両種の区別はかなり難しい。

キクスイカカミキリは茎の中に産卵し、幼虫が茎の中を食害するため、家庭園芸で問題となっているが切花栽培ではあまり重要ではない。

病害関係では、白さび病が最も重要で、葉裏に生じた白色の病斑がしだいに株全体に広がり枯死させる。ハウス栽培で発生が多いが、露地栽培においても初夏～梅雨時、秋期にしばしば多発する。薬剤耐性菌を生じやすいのでローテーション散布が重要となる。

その他黒さび病、黒斑病、褐斑病がときどき葉に発生する。花では花枯病、花腐病が花卉に発生する。また、青枯病、菌核病、軟腐病、白絹病など株全体が枯死する土壌病害も地域によっては問題となる。

キクでは、このように多くの病虫害が発生し、地域により、時期により、品種によりその優先種が異なるので、的確な診断と早期の適切な防除対策を講じる必要がある。（大阪府農技センター 木村 裕）